

上海工部局警察行政
機構改革に我方の要求
上海工部局警監事會
新黨運動の發展性を牽制
兩黨首腦部會合
政界の實勢力として邁進を期す



政民兩黨の連繫強化は

新黨運動の發展性を牽制

兩黨首腦部會合

政界の實勢力として邁進を期す

〔東京七日同盟〕政界的耳目を聚めた政民兩黨最高主腦部の會合は町田市政黨總裁の招待の下に六日夜星ヶ岡茶寮に開會、民政側より町田櫻井、小川、田原、大麻、賴母木、小泉の諸氏、政友會側より鳩山、前田、島田、中島の四代行委員以下砂田、大口、堀切、岡田の十五氏出席、先づ町田總裁から議會中は政民兩黨の緊密な連絡、連繫により無事會期を終了し得た事は感謝に耐へぬ、今後も引き續き友好關係を持続し、政界的實勢力を以て時難克服邁進したい旨の挨拶を行ひ、晚餐を共にしたる後懇談を経て、兩黨連繫の實を擧げて散會したが近く答禮の意味を以つて政友會代行委員が改めて民主主腦部を招待する事となつてゐる、かくて両黨主腦部間に於ける連繫により政界的實勢力を以て時局收拾に邁進するとの確信は愈々大きなものとなるべく、また政府側に於て新黨を企圖する場合に於ても兩黨の連繫を以て潜勢的示威力に富むものとして、今後の展開が注目されてゐる。

(寫眞は右町田總裁、左前田木藏氏)

河運計画の米擴張

東商練習船 七日無事歸航

ニカラグア開鑿を後に パナマ運河改修に決定

陸軍側の報告に基く 國防上の見地に依る

河運計画の米擴張

河運計画の米擴張

河運計画の米擴張

河運計画の米擴張

河運計画の米擴張

河運計画の米擴張

河運計画の米擴張

河運計画の米擴張

護國の英靈に捧ぐ 全國民一分間默禱

全國民一分間默禱

全國民一分間默禱

全國民一分間默禱

全國民一分間默禱

全國民一分間默禱

全國民一分間默禱

全國民一分間默禱

全國民一分間默禱

伯刺西爾時報社

新航行規則

航行規則

航行規則

航行規則

航行規則

航行規則

航行規則

航行規則

伯刺西爾時報社

航行規則

航行規則

航行規則

航行規則

航行規則

航行規則

航行規則

航行規則

</

棉生産過剰の憂なし 世界的危機脱出の兆

米國棉生產制限
最近棉の生産過剰難が製來すると
の説が傳はつて居る。世界各國が
棉生産競争に走つて居ると云ふの
である。此の問題はだいぶ大きな収穫
を前にひかて居る聖路戻としても
農家の重大關心事として一應検討
して見る必要がある。柏が生産過
剰になつて居る事は確かだ、何し
ろ昨年の米棉收穫が稀に見る天候
の好調に恵まれ一千五百萬俵の收穫
豫想だつたのが實收穫は千八百七
十萬俵に達したのだから三百萬俵
餘の増収になつて居るわけだ。從
つてそれ丈々需給均衡上に狂ひを生
じてきたわけである。だがそれで
生産過剰だとはいへる弊はない、
反對に供給不足とも云へる部分な
る根據があるので乘る。第一に米
政府に供給不足とも云へる部分な
る根據があるので乘る。第一に米
政府が棉生産制限に乗り出した事
である。三月二十二日の農業部官署
である、北米農業者は大統領の棉生産
制限に全般的支持を與へる事を決
し今年は一千萬俵を生産限度に制
限したのである。是が先づ昨年の
米棉收穫を相殺するの原因と
なる。第二に棉價の下落から南北
諸州を除き米棉競争國が棉作を熱を
失ひつゝある事である。若し棉價
が十二仙台を保つて居れば世界の
棉作は充分復興する可能性がある
だが最近は九仙台を上下して居る
有様である。そうして此の棉價は
伸びを生じて居るを見てゐる。即ち
も墨國がわでは石油會社がわが接
取非立憲を叫んで提出した訴訟に
對する聯邦裁判所の判決を待つて
本問題折衝を續け様と提案するに
對し北米がわでは該裁判所の判決
は數ヶ月、或は年と長期間を要す
る可能性があるから現在のまゝ折
衝を開けよう主張してゐると云
はれる
「メキシコ市六日U.P.」強制接
收石油會社に對する金額は石油年
輸出額の廿%を以て是に當ること
に決しカルダネス大統領は右に對
する必要訓令を與へありと政府
は認めたが右措置に對し石油會
は

「價格安が原因だ。國內需要に満たない現状だ。此の間にあって聖州のみは前年に比し二〇一三〇%の増收である。伯国内其他の地方ではミナスが先づ三千五百万キロ、北伯瑞は二億キロの豫想が實收は六百六十万キロとか無かつたのであるが伯國全土と

再検討中

ある
要あ
山あ
新規
るこ
ある
が右に對し農相は
行かうとは思つてゐるが時
確定してゐない。手許に人
案が山種してゐるので、通
理して處理して無いでから
けたいと思つてゐる云々^ト
D-0-1-八號 世界長老の
歸路に就く 錄を樹立
孤兎から飛來した水上機の
八號は去六日午前六時二分離
就きリオからヘルナンド・
ニニヤ島向て出發した
○票で政府辛勝
財政の對するの
外々政策
冒頭
對抗するも
北米に對す
ブルー
レーベー
と答辭した、次いでフラン
は爲替調節問題に入り
政府の案は佛國へヒトラーソ
ソリーの如き獨裁制を施
る結果となる
と時値にわたつて大反對演説
が大敗の結果反對投票一
票に對し三二一票の賛成投票
の通告を得て政府内では不
開の命取りになるのではないか
早くも後繼内閣の下馬鹿など
である

伊藤商店三三三
IMP. NO.4
四五
廣ヒ
リサム
部
の
○○○○○○○○
○○○○○○○○



說忠臣藏
中一圓玉
書

第十四席

(映画上流)

仕いたす外記、もう……曾はれ

吉良家の門を出た。龜井侯の家老多湖外記はホツと息をつき、一方は是れでよい、これから居の方が案じられる」と馬を乗り立て、新し橋の主家へ戻る。既に夜が白み御門が開いて、御供えりが捕ふ。その内に玄武臺へ能登守が出て参り鶴籠へ移らうと致したが、何となく心残りがあるから左右を見廻してをられる所へ、馬から飛降りた外記が

仕いたす外記、もう……曾はれ

ねぞ」

能登守は口にこそ勇ましく言ふ

ものゝ、これが即の見詰めかと思ふ

へば、奥方やや四十歳になる龜丸。

に惹かる愛着心、猛き心は有ち

ながら、ホロリとこぼすひと雲

やがて振り出す白鳥毛の二本道

具、前途を拂はせ登城する。

これが忠臣藏の劇でありますと、

殿中をさして急ぎゆく。
後には残り外記は、昨夜より、
主君の身上につき、憂慮強く能
はず、能登守は御退出になる
までは御家の安危に定かに拂り
兼ねるをもつて、自分は玄蕃の
白洲に宿きを出させ、肩間に太き
繩を寄せ、心中には八百萬の神を
祈り居る。

當時の住石とも言ふべき家老上

外記はハツと脚を衝き、

「やあ、何事か出来たか」

只今殿中におましまして、御能が

始まりましてございます」

「左様か、宜い……大儀であつ

てむづかしい顔をしてゐる。

スルと、其日の四ヶ少下りし

頃、只今で申すと午前十時過ぎ、

前に申した「押へ」の一人が表門

内へ急いで駆こ

た」

押へは去る。外記は心中に、お能

とあらば此の間に事の起る氣遣ひ

はなしと思つた。

御注進致します」

當家の住石とも言ふべき家老上

外記はハツと脚を衝き、

「やあ、何事か出来たか」

只今殿中におましまして、御能が

始まりましてございます」

「左様か、宜い……大儀であつ

てむづかしい顔をしてゐる。

スルと、其日の四ヶ少下りし

頃、只今で申すと午前十時過ぎ、

前に申した「押へ」の一人が表門

内へ急いで駆こ

た」

押へは去る。外記は心中に、お能

とあらば此の間に事の起る氣遣ひ

はなしと思つた。

御注進致します」

當家の住石とも言ふべき家老上

外記はハツと脚を衝き、

「やあ、何事か出来たか」

只今殿中におましまして、御能が

始まりましてございます」

「左様か、宜い……大儀であつ

てむづかしい顔をしてゐる。

スルと、其日の四ヶ少下りし

頃、只今で申すと午前十時過ぎ、

前に申した「押へ」の一人が表門

内へ急いで駆こ

た」

押へは去る。外記は心中に、お能

とあらば此の間に事の起る氣遣ひ

はなしと思つた。

御注進致します」

當家の住石とも言ふべき家老上

外記はハツと脚を衝き、

「やあ、何事か出来たか」

只今殿中におましまして、御能が

始まりましてございます」

「左様か、宜い……大儀であつ

てむづかしい顔をしてゐる。

スルと、其日の四ヶ少下りし

頃、只今で申すと午前十時過ぎ、

前に申した「押へ」の一人が表門

内へ急いで駆こ

た」

押へは去る。外記は心中に、お能

とあらば此の間に事の起る氣遣ひ

はなしと思つた。

御注進致します」

當家の住石とも言ふべき家老上

外記はハツと脚を衝き、

「やあ、何事か出来たか」

只今殿中におましまして、御能が

始まりましてございます」

「左様か、宜い……大儀であつ

てむづかしい顔をしてゐる。

スルと、其日の四ヶ少下りし

頃、只今で申すと午前十時過ぎ、

前に申した「押へ」の一人が表門

内へ急いで駆こ

た」

押へは去る。外記は心中に、お能

とあらば此の間に事の起る氣遣ひ

はなしと思つた。

御注進致します」

當家の住石とも言ふべき家老上

外記はハツと脚を衝き、

「やあ、何事か出来たか」

只今殿中におましまして、御能が

始まりましてございます」

「左様か、宜い……大儀であつ

てむづかしい顔をしてゐる。

スルと、其日の四ヶ少下りし

頃、只今で申すと午前十時過ぎ、

前に申した「押へ」の一人が表門

内へ急いで駆こ

た」

押へは去る。外記は心中に、お能

とあらば此の間に事の起る氣遣ひ

はなしと思つた。

御注進致します」

當家の住石とも言ふべき家老上

外記はハツと脚を衝き、

「やあ、何事か出来たか」

只今殿中におましまして、御能が

始まりましてございます」

「左様か、宜い……大儀であつ

てむづかしい顔をしてゐる。

スルと、其日の四ヶ少下りし

頃、只今で申すと午前十時過ぎ、

前に申した「押へ」の一人が表門

内へ急いで駆こ

た」

押へは去る。外記は心中に、お能

とあらば此の間に事の起る氣遣ひ

はなしと思つた。

御注進致します」

當家の住石とも言ふべき家老上

外記はハツと脚を衝き、

「やあ、何事か出来たか」

只今殿中におましまして、御能が

始まりましてございます」

「左様か、宜い……大儀であつ

てむづかしい顔をしてゐる。

スルと、其日の四ヶ少下りし

頃、只今で申すと午前十時過ぎ、

前に申した「押へ」の一人が表門

内へ急いで駆こ

た」

押へは去る。外記は心中に、お能

とあらば此の間に事の起る氣遣ひ

はなしと思つた。

御注進致します」

當家の住石とも言ふべき家老上

外記はハツと脚を衝き、

「やあ、何事か出来たか」

只今殿中におましまして、御能が

始まりましてございます」

「左様か、宜い……大儀であつ

てむづかしい顔をしてゐる。

スルと、其日の四ヶ少下りし

頃、只今で申すと午前十時過ぎ、

前に申した「押へ」の一人が表門

内へ急いで駆こ

た」

押へは去る。外記は心中に、お能

とあらば此の間に事の起る氣遣ひ

はなしと思つた。

御注進致します」

當家の住石とも言ふべき家老上

外記はハツと脚を衝き、